

ゲオルク・ビュヒナー(その二)

西田, 越郎

<https://doi.org/10.15017/2332904>

出版情報 : 文學研究. 49, pp.91-104, 1954-07-25. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :

ゲオルク・ビューヒナー（その二）

西 田 越 郎

筆者は前稿において、ゲオルク・ビューヒナーが詩人として出発するまでの生涯を簡単に述べてみたのであるが、彼の心をまず捉えたものは、宗教や文学ではなく、また彼が深い興味を寄せていた自然科学でもなく、実に政治であつたのである。ビューヒナーは、『ダントンの死』や『ヴォイツェク』の詩人たる前にまず、反動勢力のもとに喘ぐドイツ市民階級の反抗のなかで、極めて危険な戦いを挑む革命家としてこの困難な時代に登場しなければならなかつた。ビューヒナーによつて起草せられた政治パンフレット『ヘッセンの急使』(Der Hessische Landbote)は、おそらく当時の最もすぐれた、そして聰明なインテリゲンチヤであつたと思われる彼が、一八三〇年代のドイツの暗い現実をきりぬけようとしてもがいた苦闘の跡を示すものに他ならない。八折大版で僅か八頁にすぎぬこの小冊子は、その時代の社会情勢を考えあわせるとき、その余りにも急進的な内容の故に驚歎させられる。種々の障害のために、最初ビューヒナーが意図した成果は遂に得られなかつたが、一八三〇年から一八四八年の間、所謂 Vorwärts のドイツにおいて、サン・シモンあるいはフリーエなどの社会思想の影響のもとに生み出された政治パンフレットの中で、最も注目すべき、最も輝かしいものの一つであろう。記録としての意味もさることながら、この小冊子は、『ダントンの死』や『ヴォイツェク』などの作品の解明に重要

な手がかりを与えるのである。以下に、この『ヘッセンの急使』成立の事情を明らかにしつゝ、ビューヒナーの抱懐する政治社会思想を検討してみたい。

一七九四年、フランス大革命に仆れたニコラス・シャンフォールのスローガン(それはまた熱狂したパリ市民の合言葉にもなったものだが)、「あばら屋には平和を、宮殿には戦争を！」(Friede den Hütten! Krieg den Palästen!)をもつて『ヘッセンの急使』は書き出されている。それに続いて

一八三四年は、聖書の嘘いつわりが責められそうな有様である。神は五日目に百姓と職人とを創りたまひ、六日目には王侯やおえら方を創りたまうて、かれらに「この世に這いおる一切の動物を支配せよ」と宣まい、百姓・町人は虫けらに数えられかねない有様である。おえら方たちの生活は長い日曜日である。かれらは美しい邸宅に住まい、きらびやかな衣裳をつけ、丸々とふとつた顔をして、特別な言葉話している。しかるに民衆は、かれらの前にあつては、畑の下肥も同然である。百姓は鋤の後から歩き、おえら方は百姓と鋤の後から歩いて、鋤につながれた牛でもつて百姓を追いたて、己は穀粒をとり、百姓にはたゞ刈株を残すだけである。百姓の生活は長い週日である。赤の他人が眼の前で、かれらの畑をくいつぶしているのである。百姓は身を胼胝へんじょにして働き、かれらの汗はおえら方の食卓の塩なのである。

と書いている。『ヘッセンの急使』には、後にも述べるように、ヘッセンの改革運動の指導者であり、ビューヒナーの盟友

であつた牧師ヴァイディヒの筆が加えられている。従つてビューヒナーの草稿の烈しい調子は随所にやわらげられてしまつた。先に掲げた箇所についていへば、*vornehm*（おえら方）とあるのはすべて、ビューヒナーの草稿では *reich*（金持ち）となつていたという。このパンフレットの原形は今日想像すべくもないが、*vornehm* を *reich* に置きかえてみるだけでも、ビューヒナーの真意はうかがうことが出来るであらう。冒頭に、ヘッセンの農民の暗澹たる生活が描き出されているが、ビューヒナーは貧しい農民のあわれな生活を、富める者との対比において捉えた。われわれはこゝに、この危険きわまりない小冊子を敢て発表した彼の政治思想を理解する鍵を見出し得ると思ふのである。結論的にいへば、革命家としてのビューヒナーの特異性は、彼の同志乃至は同時代のドイツの革新思想家たちが、たゞ政治的革新を考えていたのと反して、彼のみは独り社会革新を目標として、政治的支配よりもむしろ社会的・経済的支配を念頭においていたことにある。

前稿において述べたように、ビューヒナーを、政治的な主義綱領を理論的に創造する才能を持った独自の政治思想家と見ることは勿論出来ない。彼は単なる急進的な行動家にすぎなかつた。彼をいわゆる社会主義者と見なすことには種々の疑点があるけれども、彼の抱いた政治思想の特異さは認めざるを得ないのである。

しからば彼のこういう思想は、如何にして形成されたものであらうか、それを考察する前に。先ず一八三〇年代のドイツが置かれていた政治・社会情勢を概観する必要がある。K・フィーエトルはその著書『ゲオルク・ビューヒナー』の中で、ヤーコブ・グリムの次のような言葉をひいて、ドイツの状態を説明している。

自由は次第に、それを自ら共に体験しない者には理解出来ない程度にまで没落してしまつた。言論の自由はいうも愚か、すべての自然らしさが抑圧されていた。警察はあらゆる事態に侵入し来り、社交生活の信頼を毒した。民衆の生活の基礎をなすすべての支え、宗教心、正義、道徳や法律に対する尊敬の念は覆されるか、暴力的にぐらつかされた。たゞ一つ固くまもられるものがある。それは公けにされた意志への反対は、それが直接にいわれたものであれ、間接にいわれたものであれ、すべて犯罪であるということである。¹⁾

こゝに語られた如きものが、ドイツの当時の有様であり、すなわちビューヒナーの政治活動の具体的目標となつたものである。

一八一五年から四八年の三月革命（フランスの二月革命）に至る三十年間は、自由な、統一されたドイツを獲得するため、ドイツ市民階級の長い闘争であり、極めて困難な時代であつた（この苦しい危険な戦いは結局挫折して、惨めな結果に終るのであるが）。周知のごとくナポレオンによる恥辱的なドイツ支配から脱出せんとする所謂 *Freiheitskriege*（自由戦争）はドイツ国民のうちに力強い祖国感情を産み、ドイツ統一の高い理想が掲げられた（アルント Ernst Moritz Arndt などによつて代表される）。かくて自由主義者の活潑な動きがあらわれるに至つた。しかしメッテルニヒによつて支配される反動的なウィーン政府は、この自由主義運動を革命的となして、その成長を常に疑惑の目をもつて見ていた。またウィーン会議において諸侯の約束した自由、憲法制定は果されたであらうか。否である。自由主義者の不満は、先ず憲法獲得乃至は改善の闘争に全力を注ぐという形をとつて現われた。これは革命という程のものではなかつたにも拘わら

ず、反動勢力はこれに重圧を加えて、反つて多くの自由主義者を革命運動へ追いやる結果となつたのである。一八三〇年パリに起つた七月革命の報がドイツにもたらされた時、それがかゝる状態におかれたドイツの民衆を刺戟し、勇気づけたことはいうまでもなからう。ヘルゴラント島にあつたハインリヒ・ハイネは躍りあがつて「ラ・ファイエット、三色旗、ラ・マルセイエーズ」と叫び、ルードヴィヒ・ベルネやカール・グツコウは感激にうちふるえたのだつた。だが、ドイツに於ては、自由運動への新しい弾圧を告げる契期となつたにすぎない。かくて今やドイツ全土に、自由は全く影をひそめてしまつた。以上のような経過を辿りつゝ、ドイツの政情を改めるには、もはや上からではなく、下から、すなわち大衆の力によらねばならぬという空氣が醸成されて行つた。Gewaltによる解放である。

ビューヒナーの生国ヘッセンはどうであつたか。人口七〇万にすぎない小国、ヘッセン・ダルムシュタット大侯国もその例に洩れなかつた。ナポレオン没落後、間もなく立憲国となつたものの、大侯ルードヴィヒ二世は、憲法改正には応ぜず、支配者の苛斂誅求はナポレオン時代と何ら變るところはなかつた。多年の戦争によつて生じた数百万グルデンに達する莫大な負債のために、同国の經濟事情は悪化の道を辿り、民衆殊に農民の窮乏は甚しかつた。デュ・ティール Du Thil に率いられる政府は自由主義的運動を圧迫し、一八三〇年秋、七月革命後間もなく、重税に反対して上部ヘッセンに蜂起した農民一揆は忽ちにして潰滅したのである。革命的伝統を持つヘッセンに生まれ、こういう空氣のなかで農民の慘澹たる生活と闘争と敗北をまのあたりに見ながら、ビューヒナーは成長した。

革命家としてのビューヒナーの政治的背景は以上のようなものであつた。ビューヒナーにおける自由思想はそもそも生得的なものであつたことは否定出来ない。既に述べたように、父エルンストが反動的な人柄であつたのに対して、母カロ

リーネは愛国詩人テオドール・ケルナーなどを愛する情熱的な女性であつた。ビューヒナーはその母の資質を多分に稟けているように思われる。自由思想の明瞭な芽ばえはダラムシュタットのギュムナージウム(当時における最も優秀な学校の一つであつた)在学中に見られる。カートーの自殺に関する彼の演説である。また *Bonjour, citoyen!* と挨拶するのが常であつたと、彼の親しい一学友は述べてもいる。

一八三一年の秋、ビューヒナーはシュトラースブルク大学に医学生として入学した。シュトラースブルクこそは彼の政治思想の揺籃の地であり、彼の革命家としての基礎はこゝで築かれたといつても過言ではなからう。シュトラースブルクは大革命以来ほとんどフランス化して、フランス語が行われていた。殊に七月革命の直後でもあり、革命的雰囲気に溢れていた。ルイ・フィリップ市民王をめぐつて、こゝには革命思想をいだく人々や、また反動勢力に抵抗して弾圧を逃れるドイツ人亡命者が多数集まり、謂わば革命の巢窟であつた。灰色の暗いドイツから、独仏二文化の合流点ともいふべきこの地へ来たビューヒナーの目に写つたものは、若々しい生気に溢れた革新の雰囲気であり、恐らく彼は快い解放感を味わつたことであらう。ポーランドのロシアへの反乱、あるいはベルギーのオランダからの離叛等の重大事件も、彼の両親宛の書簡中に述べられているが、そこからはまた傍観者としての姿しか受けとることが出来ない。(Für eine politische Abhandlung habe ich keine Zeit mehr, es wäre auch nicht der Mühe wert, das Ganze ist doch nur eine Konödie. Der König und die Kammern regieren, und das Volk klatscht und bezahlt. 一八三三年十二月)また翌三三年四月のフランクフルト警察焼打事件なる騒擾については異常な関心を示し、同じく両親にあてた手紙の次の言葉は、彼の革命的運動に関する把握の進展をうかがわせるに足るものである。

フランクフルト事件のお手紙、本日落掌。私の意見はこうです。現代において何か役に立つものがあるとすれば、それは暴力です。今日われわれの君侯から何を期待すべきか、それはわかっています。かれらが認めたものといえればそれはすべてかれらがやむを得ず承認を余儀なくされたものです。そしてその認められたものさえ、恰かも施物のように、また永遠に口をあげて見とれている民衆に、しめつけすぎた襁褓の紐を忘れさせるためみじめな玩具のように、私たちに投げ与えられたのです。……人は若い人たちが暴力を用いたことを非難します。だが私たちは永遠の暴力の状態にあるのではないのでしょうか？ 私たちは牢獄で生まれ、そして大きくなつたので、自分たちが手足を鎖でつながれ、口に猿ぐつわをはめられて、穴の中に放りこまれていることにはや気がつかないのです。一体あなたは何を法治状態といるのですか？ 法律とは、とるに足らぬ腐敗した少数の者の不自然な要求を満足させるために、多数の庶民を苦役する家畜にしてしまうものではありませんか？ しかも粗暴な軍隊の力と自分の代弁者たちの愚かな術策とによつて支えられているこの法律こそ、権利と健全な理性とに加えられ永遠の粗暴な暴力とすべきです。そして僕は口と手で出来るだけこれと戦うつもりです。今度の事件に私が参加しなかつたのも、また恐らく起るであろうこの種の事件に加わらないのも、不賛成のためでも、また恐いからでもありません。たゞ現在においては、革命運動はすべて無益な企てだと思ふからです。またドイツ人をかれらの権利のための闘争の準備の出来た民衆だと考える、目の眩んだ人たちと同じになりたくないからです。このような馬鹿げた考えがこのフランクフルト事件をひき起したのです。この誤謬はなかなか償ふことの出来ないものです。しかし誤ちは罪ではありません。ドイツの無関心こそ、実際、すべての目算を駄目にして

しまうものなのです。……………（一八三三年四月五日）

こゝには、当時ドイツにおいて果して革命が可能であるかについての彼の疑念が述べられている。そして「ドイツ人をか
れらの権利のための闘争の準備の出来た民衆だと考える」ことの危険を説いているのは、やがて来るべきビューヒナーの
実践行動、特に『ヘッセンの急使』の考察の重要な鍵となるものである。同年六月のやはり両親あての手紙のなかで、「革
命遊兵」*revolutionäre Kinderstreiche* とつづいているのも、以上のような見解から発せられた言葉であろう。また

私は常に自分の主義に従つて行動するでしょう。しかし大衆の必然的な要求のみが変革を招来し得るものであり、個人
の運動や絶叫はすべて無益な愚行であるということを最近になつて学びました。かれらはものを書く——だが誰も読み
はしない。かれらは叫ぶ——聞いてくれる人はない。かれらは行動する——助けてくれる人はない。……………

（一八三三年六月、両親宛）

ともいう。孤立した自由主義者の運動ではなく、「必然的な要求」に基づく大衆 *die große Masse* の蜂起のみが変革を
なすとげるといふ確信の上に、彼の新しい政治思想が展開されてゆくのである。これはもはや単に社会改革という底のも
のではなく、断乎たる社会革命であつた。

さてこうしたビューヒナーの思想は、シュトラースブルクに集まつた革命的思想を抱く人々から学んだものであつた。

その頃、ここには『人權協会』*Société des Droits de l'homme*なる革命的結社が設立されていて、ビューヒナーもこれに属していた。フランスにおける革命的思想家の活動をつぶさに体験して、ビューヒナーは体内に新しい精神のみなきるのを感じた。彼の眼前にあり、そして忘れることの出来ないものは、苦難にあえぐ祖国ドイツの姿であり、それは正に根本的な解決を待つていた問題であつた。ビューヒナーの中には、歴史の一切の束縛を払いのけて、来るべき大衆の時代への情熱的な精神が輝き始めたのである。

ビューヒナーは一八三三年の秋シュトラースブルクから故国ヘッセンのギーセン大学に移つた。国法による止むを得ぬ事情とはいへ、シュトラースブルクの自由な空気と別れるのは彼にとつて耐えがたいことであつた。彼はギーセンの田舎政治 *Winkelpolitik* や革命遊戯にかゝりあうつもりはないといつた。前にも述べたヘッセンの沈滞しきつた空気は彼にとつて我慢のならないものであり、その凡庸さは恐ろしい程であり、彼はほとんど窒息しそうな気がした。街路の狭い、陰鬱な、生彩を欠いた小さな町ギーセン。またフォードゲゼンの雄大な風光に親しんだビューヒナーの目に、故国の自然は何とせよこましく、みすばらしく写つたことであらう。彼は許嫁のミンナ・イエーグレに宛てて書いてゐる。

Hier ist kein Berg, wo die Aussicht frei sei. Hügel hinter Hügel und breite Täler, eine hohle Mittelmäßigkeit in allem; ich kann mich nicht an diese Natur gewöhnen, und die Stadt ist abscheulich.

(一八三四年? 春)

彼はその沈鬱が昂じて病氣を患い、遂には一時ダラムジュタットに帰らねばならぬ程であつた。当時ギーセンでは大学^{ユニバーシティ}生組合が復活され、黒・赤・金の熱狂的な愛国主義が濶歩していたが、それはフランスの政治的・社会的な動きを見て来たビューヒナーにとつて我慢のならないものであり、組合の学生はいずれも愚物に思われた。相互に反撥を感じ、勢い彼は学生から離れることになつた。そのの医学生であり、後にスイスに逃れて、ジュネーヴ大学の初代総長になつたカール・フォークトは、その自伝にこの交つた青年ビューヒナーの肖像を、尊敬と反感とを混えてこう描いている。

正直にいつて、私たちはこのゲオルク・ビューヒナーに好感は持てなかつた。彼は大きなシルクハットをかぶつていたが、それがいつもあみだになつて、うなじにのしかゝつていたので、いつも雷がなつた時の猫のような顔をしていて、すつかりのけ者になつていた。いさゝか放蕩に身をもち崩したおちぶれた天才、通称「赤毛のアウグスト」、アウグスト・ベッケルとだけつきあつていた。彼の孤独は傲慢と解されていた。ところが明らかに彼は政治的陰謀に係して、一二度革命的な言辞を洩らしたこともあつたので、夕方大学生たちがクラブからやつて来て、彼の家の前に立ちどまり、彼に皮肉な万才「ヨーロッパの均衡維持者、奴隷売買廃止論者、ゲオルク・ビューヒナー万才」を唱えることも稀ではなかつた。部屋にともるランプが、彼の在宅を示していたが、彼はその連呼する声がかきこえない様子をしていて。ヴェルネキルク（註、ギーセン大学のすぐれた神経医学者）の演習には非常に熱心で、教授と彼の議論で、彼が根本的知識を身につけていることが間もなくわれわれ他の者にもわかり、尊敬の念を起させた。しかし近づきになるまでには至らなかつた。彼の無愛想な、孤独な性格は、いつもわれわれをよせつけなかつたのである。

この言葉にもあるように、ビューヒナーは、秘かに政治活動に関与していた。彼はギーセンにおいて三人のすぐれた友人を得た。すなわち前記のベッケル及びグスタフ・クレム、カール・ミンニゲローデである。一八三四年の初頃シュトラースブルクの模範にならつて、三人の友人と他に若干の学生、職人を加えて秘密の結社を組織した。そしてそれはビューヒナーの提唱で『人権協会』*Gesellschaft der Menschenrechte*と命名された。彼はシュトラースブルクでの体験を生かして、革命的蜂起を準備することをもつて、この組織の目標とした。広播な大衆の蜂起を望むならば、下層の民衆と結びつかねばならない。そのためには、^{プロパガンダ}宣伝を必要とする。こうして『人権協会』はフランスのその如く、学生の他に職人が加えられたのであつた。

ビューヒナーは、大衆の蜂起によつてのみ、偉大な変革は成就されるという確信を抱いてドイツに帰つて来た。しかしドイツのような後進的な国家における革命の困難さは、彼も十分認めるところであつた。先ずこの急進的な思想を下層の民衆にも理解しやすく解説することが必要であつた。そのためには民衆の間に宣伝を組織化しなければならない。その一手段としてパンフレットの発行が考えられたのである。また若い革命家の養成、あるいは武装訓練も重要な仕事であつた。ビューヒナーは単なる政治改革者ではなく、社会革命家であつた。その点一般の自由思想家と立場を異にしており、遙かに進んだものであつた。しかしメッテルニヒの反動支配勢力を倒すことは両者に共通な目的であつた。ビューヒナーが、ヘッセンに既に存在したブルジョアの秘密結社と手を結ぶに至つたのは、これらの数も多く、よく組織化され、経験の豊かなグループの力によつて、自己の急進思想を少しでも早く、またより広播に拡げたいという念願からであつたと思われる。

かくて『ヘッセンの急使』の共同起草者であるヴァイディヒとビューヒナーとは結ばれることになつた。フリードリヒ・ルードヴィヒ・ヴァイディヒは一七九一年に生まれ、ギーセン大学に神学を学んだ牧師であり、ギーセンに近い小さな町ブツバへの教師であつた。ビューヒナーはベッケルを通じてヴァイディヒを知つたのであるが、時にヴァイディヒは四十二才であつた。さて彼は始め大学生組合運動に属したりペラリストであり、自由なドイツ統一といつても理想主義に育くまれた思想を反映して、中世的なドイツ帝国の樹立を考えていたのであるから、ビューヒナーの急進思想とは趣きを異にしていた。先述のごとく、両者に通ずることは、共通の敵、独裁的君主を仆すことであつた。ビューヒナーは、先ずヘッセンの農民を煽動することを提唱し、宣伝の最も有効な手段をパンフレットに見出した。かくて、この時代には驚くべき急進的内容を盛つた『ヘッセンの急使』が発行された。こゝで注目しなければならないことは、ビューヒナーが最初に意図したところから推察して、宣伝は最下層の民衆、特に農民に集中し、彼らの物質的な利害を目標して行われねばならないと考へた点である。本稿の初めに述べた如く、彼は貧しい農民の生活を富める者との対比において捉えんとした。経済的改革を意図したということは、ビューヒナー以前には何人も試みなかつたところであり、これは後世のコミュニケーションの先駆ということも出来る。

一八三四年七月、バーデンブルク城址に『人權協会』の会員が集まり、パンフレット発行の協議を行い、ビューヒナーが起草することになつた。彼から原稿を示されたヴァイディヒは、その余りに急進的な内容、激しい調子に感歎すると同時に驚いた。牧師であつたヴァイディヒはこれに聖書風の趣きを多分に加え、ビューヒナーの原案は全く骨抜きにされてしまつた。彼はそれに対し大いに不快を感じ、憤慨したという。

『ヘッセンの急使』は一八三四年七月に発行された。初めにパンフレット取扱上の注意を掲げ、当時の革命運動のきびしさを物語っている。この小冊子は創刊号のみで終り、さしたる効果もあがらないうちに、会員の中から裏切者が出たために、ミンニゲローデ、ヴァイディヒ、クレムが捕えられてしまった。パンフレットの大部分は、後難を恐れる農民の手によつて官憲に差出された。しかし彼ら農民に非常に深刻な印象を与えたことは否定出来ない。

ビューヒナーは、一八三四年から翌年へかけての冬、ザルムシュタットの自宅に潜んで身辺に危険の迫るのを感じつつ、自然科学の研究にその不安焦燥をまぎらしていた。しかしそれをもつても内面の緊張を解くことは出来なかつた。そして何よりも彼は外国へ逃れる費用が欲しかつた。かくて僅か五週間の短時日で書きあげられたのが『ダントンの死』である。ビューヒナーはかのパンフレットが広く行きわたらず、農民を動かすことに失敗して、深い失望を味わつたのであるが、ドイツの灰色にとざされた暗い現実から絶望を感じ、痛切な孤独感を抱きながら、なおも民衆の力を信じて疑わなかつた。彼が革命そのものに幻滅を感じたとはいえない。無事危機を脱して、シュトラースブルクに再び逃れてから、以前のような政治運動からは遠ざかつていつた。しかしその後グッコウに宛てた手紙から、われわれは彼のギーセン時代の確信が少しも揺らいでいないことを知り得るのである。『ダントンの死』の中で、相対立する二人物、ダントンとロベスピエールとならんで、民衆が大きな役割を演じているのを見るがよい。民衆がダントンとロベスピエールのいずれに就くべきか迷っている時、民衆の一人は、ダントンの私生活を曝露し、それによつて全体の方向が決定される。民衆はダントンを仆せと叫んで、ダントンは遂にギロチンにかけられるのである。

ビューヒナーは、ドイツの民衆がいつかは立上ることを信じていた。フイエトルはいう。

ビュヒナーは、自己の属する社会層を却けて去つた最初のドイツインテリゲンチヤの一人であり、新しい、より公正な秩序を大衆の蜂起から期待し、大衆のことをわがことと考えた最初の市民的インテリゲンチヤの一人であつた。⁽²⁾

註 1) K. Viator : Georg Büchner. Bern 1949. S. 41.

2) *ibid.* S. 62—63.